

# 子どものネット問題対策研究（延長）

研究代表者 竹内 和雄

兵庫県立大学環境人間学部

## 1 はじめに

マスコミでは連日、子どもたちのネット問題を報じている。ネットいじめやネット依存、出会い系サイト等のトラブルが続発し、早急な抜本的な対応を急ぐ声も多い。

これまでは、大人主体で、「フィルタリング奨励」や「小中学生の携帯電話所持を禁止する条例」（石川県）や「21時以降の小中学生の使用禁止」（愛知県刈谷市）等の「禁止」「制限」が中心の対策が取られてきた。これらは一定の成果を上げたが、子どもたちのネット利用がさらに低年齢化している今、こういう対応だけでは限界にきている。

本研究ではこのような状況の改善の一つの方策として、子どもたち自身にネット問題への対応を考えさせることに取り組んだ。子どもたちのネット空間は、大人では見えにくい。さらに、子どもたちが自分たちで暗黙のルールを幾重にも張り巡らせているので、大人が外から禁止や制限を声高に訴えるだけでは限界がある。これまでの研究は、『サイバー型いじめ』（Cyber Bullying）の理解と対応に関する教育心理学的展望（小野・斎藤，2008）等、「ワンクリック詐欺疑似体験教材の開発」（新谷・長谷川，2013）、「デモンストレーションを行った教材開発」（鈴木ら，2012）等、ネットいじめへの対応や、ネット上で青少年が被害に遭わないための対応実践等がなされ、体験型プログラムの有用性が示されている。しかし、これらの研究は、大人が対応策を考え、子どもに提供する形をとっているため、急速に変化するインターネット上の子どもたちの所作についていくことができず、どうしても対応が後手にまわってしまう。大人の実態把握が遅れてしまうことと、子どもたちへの有効な対応策について、大人の感覚だけではうまくいかない。

今年度、特に低年齢化対策とに取り組んだ。小学生にも急激に普及が進んでおり、この対応も急務である。また、インターネットの問題は、デートDV、JKビジネス等の課題に結びつき始めている。本研究ではそのあたりも対象に加えて取り組んだ。



スマホサミットの様子（スマホ使用の現状についての討議中）

## 2 研究の目的

以上のような状況を踏まえて、本研究では、子どもたちが自分たちのインターネット利用について考える機会である「スマホサミット」の場で、何が行われ、どのような実態がわかり、さらにどういった対策が必要であるかについて明らかにすることを目的とする。子どもたちのインターネット問題の解決に向けた取組の中心に子どもたち自身を据えることで、大人だけでは見えづらい、実態把握ができ、さらに実態把握からわかってきた課題についての解決策についても子どもたちと大人をつないで見いだしていくことまでを視野に入れた研究である。

この問題は大人だけの解決が難しく、かといって子どもだけでも効果が薄い。子どもと大人が共に考え、今後のインターネット問題に対する対策の方向性を提案したい。小学校や中学校、高等学校でのインターネット問題解決のための実践に寄与し、またPTA等を通して、各家庭の対策に有意義に使われるようなものにできれば、今日的な意義は高いと考える。

## 3 研究の方法

### 3-1 スマホサミットの実施場所と概要

#### (1) 都道府県単位

大阪府スマホサミット（主催：大阪府青少年課）

- 05月27日 第1回 情報交換及びアンケート作成
- 08月21日 第2回 アンケート結果分析及び3か条作成
- 10月27日 第3回 啓発資料作成
- 12月02日 成果発表会（大阪市西区民会館）

スマホサミットinひょうご（主催：兵庫県青少年課）

- 06月24日 第1回 情報交換及びアンケート作成
- 10月07日 第2回 アンケート結果分析及び啓発資料作成
- 12月16日 成果報告会（兵庫県公館）

滋賀県スマホサミット（主催：滋賀県PTA連絡協議会）

- 07月01日 第1回 情報交換及びアンケート作成
- 09月02日 第2回 動画、授業案作成（野洲市民会館）
- 10月20日 成果発表会（草津市）

いいねっと京フォーラム（主催：京都府警察 京都府青少年課）

- 07月14日 事前学習会（京都府警察110番センター）
- 08月01日 成果発表会（京都ロームシアター）

岡山スマホサミット（岡山県教育委員会、山陽新聞社）

- 05月12日 第1回 情報交換及びアンケート作成
- 07月24日 第2回 アンケート結果分析及び啓発資料作成
- 09月15日 第3回 啓発資料作成
- 10月13日 成果報告会（岡山大学金光ホール）

奈良県スマホサミット（主催：奈良県PTA連絡協議会）

- 08月28日 第1回 アンケート読み取りワークショップ
- 01月27日 成果発表会

## (2) 市町村単位

- たつの市中学生サミット（兵庫県たつの市教育委員会）  
07月31日 第1回 情報交換及びアンケート作成  
12月01日 第2回 アンケート結果分析及び啓発資料作成  
12月01日 第2回 保護者への報告会
- 小松市中学生サミット（石川県小松市中学生サミット）  
05月29日 第1回 情報交換及びアンケート作成  
07月27日 第2回 アンケート結果分析及び啓発資料作成  
10月27日 第3回 啓発資料作成（動画、授業案等）  
10月14日 成果報告会（小松市民会館）
- 芦屋市スマホサミット（兵庫県芦屋市スマホサミット）  
07月19日 アンケート結果から新聞製作
- 魚津市スマホサミット（富山県魚津市スマホサミット）  
07月19日 アンケート結果読み取りワークショップ
- 高石市スマホサミット（大阪府高石市スマホサミット）  
08月06日 アンケート結果読み取りワークショップ
- 上郡町スマホサミット（兵庫県上郡町スマホサミット）  
07月18日 アンケート結果読み取りワークショップ
- 多可町スマホサミット（兵庫県多可町教育委員会）  
08月08日 アンケート結果分析及びスマホ3か条作成  
08月08日 教員への報告会
- 三木市スマホサミット（兵庫県三木市教育委員会）  
08月29日 アンケート結果分析及びスマホ3か条作成  
08月29日 教員への報告会
- 相生市スマホサミット（兵庫県相生市教育委員会）  
08月27日 アンケート結果分析及びスマホ3か条作成
- 神戸市スマホフォーラム（兵庫県神戸市）  
06月02日 第1回 アンケート作りワークショップ  
07月29日 第2回 啓発資料作成（啓発動画等）  
08月05日 神戸市スマホフォーラム
- 神戸市教え合い学習（兵庫県神戸市教育委員会）  
06月27日 水木小 1日目 情報交換ワークショップ  
07月04日 2日目 啓発資料作成1  
07月11日 3日目 啓発資料作成2  
07月18日 4日目 6年生が下級生に啓発授業  
09月14日 有野台小 1日目 情報交換ワークショップ  
09月19日 2日目 啓発資料作成1  
09月21日 3日目 啓発資料作成2  
09月26日 4日目 6年生が下級生に啓発授業  
10月01日 真陽小 1日目 情報交換ワークショップ  
10月05日 2日目 啓発資料作成1  
10月10日 3日目 啓発資料作成2  
10月13日 4日目 6年生が下級生に啓発授業  
01月11日 大池小 1日目 情報交換ワークショップ  
01月16日 2日目 啓発資料作成1  
01月18日 3日目 啓発資料作成2  
01月25日 4日目 6年生が下級生に啓発授業  
01月30日 塩谷北小 1日目 情報交換ワークショップ  
02月01日 2日目 啓発資料作成1

02月06日                    3日目 啓発資料作成2  
02月08日                    4日目 6年生が下級生に啓発授業

**(3) 配慮が必要な児童生徒対象**

大阪府立寝屋川高校（定時制）

07月13日 生徒対象講演会（以後、継続支援）

**(4) 近畿総合通信局**

動画フェスタ発表会

12月15日 動画フェスタ発表会（内田洋行にて）

**(5) 新たな課題に対応したもの**

07月17日 自撮り被害防止サミット（愛知県警察）

08月07日 スマホに潜む危険を考えるシンポジウム～デートDV&JKビジネス～  
生野区役所にて

11月03日 性被害セミナー（愛知県警察）



スマホサミットの様子（討議結果の発表）

## 3-2 スマホサミットの詳細（内容等）

「スマホサミット」が先にあるのではなく、各地の子どもたちの実態に応じて、それぞれの実施主体が課題解決のために「スマホサミット」の実施を決め、そのコーディネートしていったというのが実情である。そのため、日数、実施内容を含めて、多様な形式がある。すべての「スマホサミット」に共通しているのは、「子どもたち自身が自分たちのスマホ使用の実態を出し合い、対策を考える」ことである。実際のサミットの開催日数は、1～4日間と様々であるが、最も一般的な3日間の基本的な流れを記載する。

### （1）1日目 スマホの使用の実態共有

各地で20～50人の児童生徒が集まって、自分たちのスマホ使用について考える。生徒会執行部員、学年代表等、参加する子どもたちはそれぞれの場所によって様々であるが、基本的にはそれぞれのコミュニティを代表して参加している。1日目は、アイスブレイクに力を入れ、形態は多少の違いはあるが、最初に使用実態を共有する。多くの場合、6人程度の班で「ネットの良いところ、悪いところ」をKJ法的な手法を用いて共有する。地域ごとの違いはあまりなく、3ヶ月くらいの短い時間で、子どもたちが多く使うアプリ等が変わっていくことが多い。昔は、口伝えで伝承していた文化が、インターネット上で一気に広がって行く様子が見える。出た意見を参考にして、子どもたちがアンケート項目を考え、次回までに実施、集計、分析する。集計、分析については、各地の大人と当会が協力して行っている。

### （2）2日目 アンケート分析及びルールづくり

まず、アンケート結果を元に自分たちの課題を絞り込む。多くの場合、「依存（時間、お金）」「人間関係（ネットいじめ等）」「危険（出会い、炎上等）」に課題が集約されるが、地域によって特殊な課題がわかったときは、それも話し合う。その課題に対応したルールづくりをする。さらに啓発のための具体物を制作し、以後の活動に活かしていく。

### （3）3日目 成果発表会

一連の取り組みの成果を発表する機会である。子どもたちだけでなく、その地域の大人も参加して共に考える機会としている。アンケート結果発表を行い、その結果、自分たちがどのような対策を考え、実際にどういったことを行ったかを発表する。多くの場合は、実際の取り組んだ児童生徒諸君がパネルディスカッション形式で、自分の考え、思いを語ることが多い。



スマホサミットの様子（スマホ使用の実態討議）

### 3-3 スマホサミットへの関与方法

#### (1) コーディネーター

それぞれの地域の持つ課題を読み取り、サミット全体の流れや方向性を主催者と相談してコーディネートすることがまず大きな関与である。主催者の思いも様々で、関与度合いも様々であるため、この段階が非常に重要である。特に、現状では主催者が異なる場合が多く、関与できることに幅がある。教育委員会、青少年課、警察、新聞社、PTAなど、それぞれが扱うことができることが異なっているので、当然変わってくることが多い。この役割は、主に研究代表者があつた。

#### (2) ファシリテーター

実際のサミットでは、子どもたちが円滑に議論していくためには、自分たち以外の第三者が必要である。以前は学校教員が担当することもあつたが、教員にはよくない使い方を抑制するための働きも求められるため、教員がファシリテーターになるとうまくいかないことも多かつた。そこで最近のサミットでは、事前に研修を積んだソーシャルメディア研究会所属の大学生がファシリテーターとして参加している。概ね6人程度の班に1名の大学生が関わっている。

#### (3) データ分析

子どもたちが作成したアンケートを、子どもたちが求める形で分析して子どもたちに提示する役割である。研究代表者とソーシャルメディア研究会所属の大学生が担当している。

#### (4) 啓発資料制作補助

子どもたちは啓発資料を作って、自分たちの啓発に役立てたいと言うことが多い。以前は、ポスター、チラシ、新聞等のアナログなものが多かつたが、最近では、啓発動画や啓発CM等のデジタルなものが増えている。そういった動画制作にソーシャルメディア研究会所属の大学生が関わっている。子どもたち発案のシナリオを実現可能なものにして、2～3分にまとめている。

#### (5) 発表会運営、補助

発表会は、司会進行から舞台転換まで、基本的に子どもたちだけで運営する。そのための台本づくりや練習や補助には研究代表者とソーシャルメディア研究会所属の大学生が関わっている。

なお、ソーシャルメディア研究会は、研究代表者のもとに2012年頃に自然発生的に集まってきた、学生達の集まりである。もとは教職を目指す学生たちが、プレゼン能力向上や授業力向上のために研究代表者のもとに集まってきたもので、単位取得等のメリットはない。研究代表者が各地で行っている、小中学生対象の情報モラル講座やスマホサミット等に関心を持つようになり、現在は、研究代表者ととも情報モラル講座を行ったり、スマホサミットのファシリテーターやアンケート分析、発表会補助などをしたりするようになっている。



C県スマホサミットの様子（討議内容の発表）

## 4 研究の結果と考察

今年度実施したサミットの状況を記していく。それぞれのアンケート結果を提示し、そこでわかったことや子どもたちの意見を記載して考察する。さらに、各地のサミットでの子どもたちの発言等からわかったことも記載していく。アンケート文言や分析方法は、ある程度定型を示して行ったが、各地の子どもたちの意見にそって、適宜修正している。今回は、大阪府、兵庫県、奈良県、岡山県、小松市（石川県）、魚津市（富山県）の結果について記載する。今回実施したアンケートのうち、地域性や規模を考慮して6つの地域の結果を考察を記載する。

### 4-1-1 アンケートの実施時期と対象 結果

#### 大阪府2018 小1～高3

小男	4580人	女	4413人	計	8993人
中男	2861人	女	2927人	計	5788人
高男	1177人	女	1529人	計	2706人
計男	8618人	女	8869人	計	17487人

実施 2018年7月

#### 兵庫県2018 小5～高3

	男子	女子	合計
小学生	450人	453人	903人
中学生	854人	852人	1706人
高校生	840人	800人	1640人
合計	2144人	2105人	4249人

実施 2018年6月

#### 奈良県2018 小中高

	男子	女子	合計
小学生	697人	677人	1374人
中学生	792人	773人	1565人
高校生	19人	16人	35人
合計	1508人	1466人	2974人

実施 2018年6月

#### 岡山県2018 中1～中3

	男子	女子	合計
中1	625人	580人	1205人
中2	581人	563人	1144人
中3	610人	591人	1201人
合計	1816人	1734人	3550人

実施 2018年7月

#### 小松市2018 小4～中3

	男子	女子	合計
小学生	1314人	1392人	2706人
中学生	1421人	1419人	2840人
合計	2735人	2811人	5546人

実施 2018年6月

#### 魚津市2018 小4～中3

	男子	女子	合計
小学生	491人	466人	957人
中学生	552人	485人	1037人
合計	1043人	951人	1994人

実施 2018年5月

## 4-1-2 アンケート実施時期と結果、考察

多くの地域に関わり、それぞれの地域のニーズに応えた実施方法で行った。今年度は、子どもたちだけでなく、教育委員会や校長会、学校教員、警察等へもニーズ調査を広げたので、より多彩な方法になった。

これまでの大きな変化は、大人がそれぞれが低年齢化に危機感を強く感じていることである。なんとかしてはいけない。そのための第一歩を踏み出したいと思っている。子ども達自身も、自分の問題を含めて危機感を強く持っているので、大人と子どもが一体になった取り組みになってきている。どの地域も子どもたちの「提言」に大人が耳をしっかりと傾け、方策につなげていっていることは、今後に希望が持てると思っている。

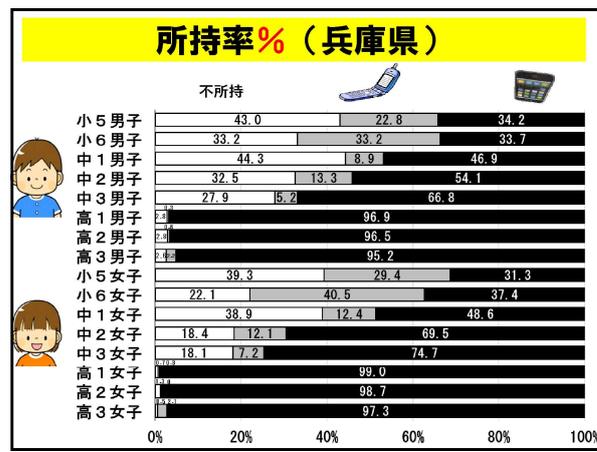
## 4-2 携帯電話所持率

以下、各地の携帯電話所持率と考察を記載する。

### 4-2-1 携帯電話所持率、結果

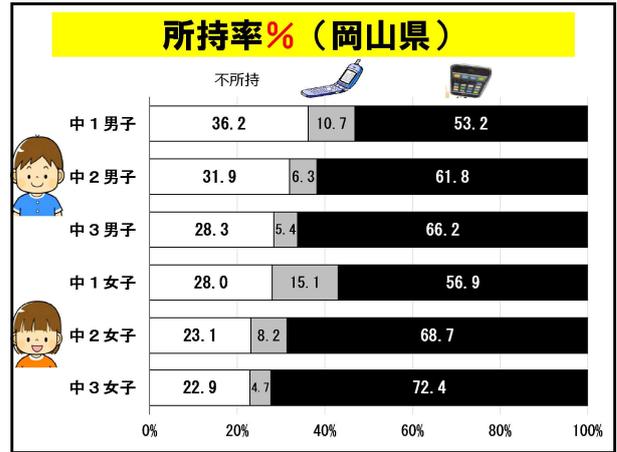
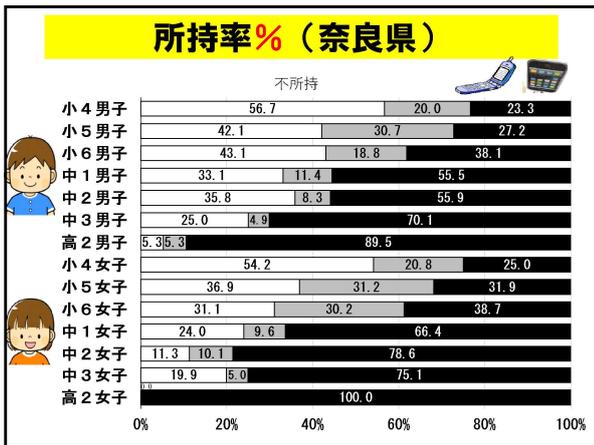
以下、各地の携帯電話所持率のグラフを示す。掲出しているのは、保護者等の機器を借りて使用しているのではなく、自分自身の携帯電話を所持している割合である。地域によって対象が異なるため単純な比較はできないが、「不所持」「ガラケー所持」「スマホ所持」で調査した。

なお、調査は学級担任が配布し、匿名である。各自のペースで回答した。また、答えたくない質問には堪えないで良い旨、伝えている。

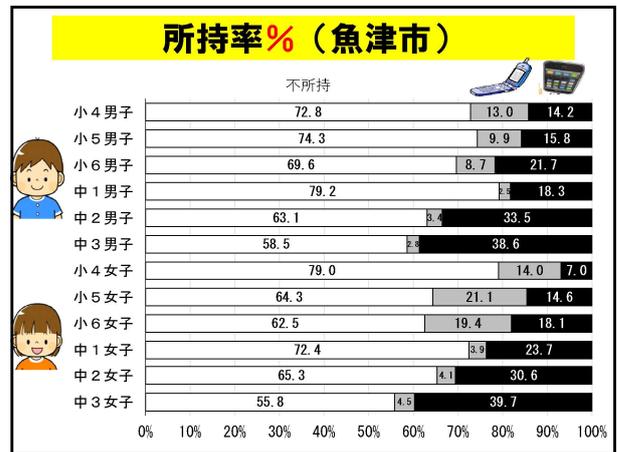


大阪府の子どもたちは「低年齢化」にこだわったため、対象を小学1年生からにした。小学1年生ですでに2割以上所持している。小学6年生で半数近く、中学1年生は約8割が所持している。これまで多くの地域で、「携帯電話等についての啓発活動は中学校入学以降」にしてきたが、この結果を見る限り、中学校入学時ではすでに遅く、小学校低学年からスタートしなければならないことが見て取れる。

兵庫県の子供達は、「男女の違い」にこだわったため、男女別に掲出している。グラフから見る範囲では、所持については、目立った男女の違いは見られなかった。



奈良県は高校生の数字が少なかったが、参考のために掲出している。岡山県は中学生だけの実施である。どちらも男女別の分析にこだわったが、若干女子の所持が多いが、目立った違いは認められなかった。



他の地域に比べて、小松市、魚津市は所持率が低いことがわかったが、経年で見るとかなりの勢いで所持率が増えているので、子どもたちの危機感強い。

#### 4-2-2 携帯電話所持率、考察

最近はその地域の地域でも携帯電話等についての調査を実施しているが、多くの大人にとって、それぞれのこれまでも調査結果よりも「厳しい」と受け止める結果だったようだ。理由としては、子どもたち自身の調査なので、子どもたちがより実態に近い回答をしたことが考えられる。そういう意味でもこういう取り組みは意義があるのだと再認識した。

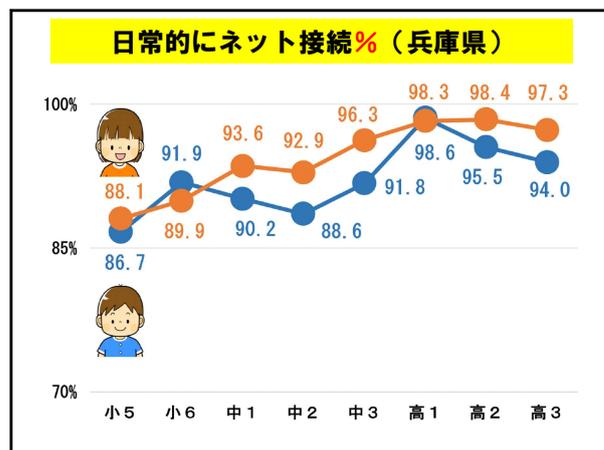
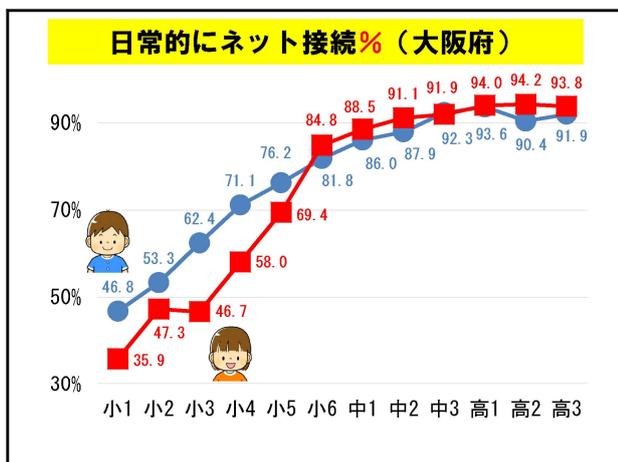
まだ予想以上の低年齢化が進んでいる。今回は大阪府だけが小学1年生からの調査したが、小学1年生ですでに21%が自分のスマートフォンを所持しているという結果が出た。小松市や魚津市の小学4年生よりも所持が多いが、これまでの経緯から、そのような地域でも都会に追いつく時期が必ず来るので、来年度以降、より低年齢、できれば小学1年生くらいからの調査の必要性が指摘できる。

実際に、そういう地域の子どもたちや教員等の声からも、もっと低学年からの実施の必要性を訴える声もあがっているので、来年度への課題としたい。

### 4-3 日常的にネット接続する割合

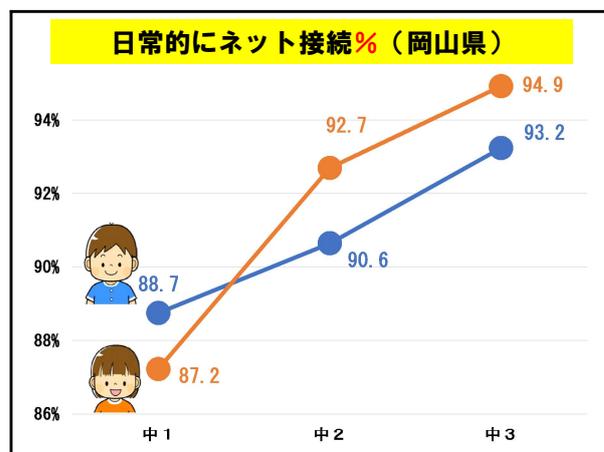
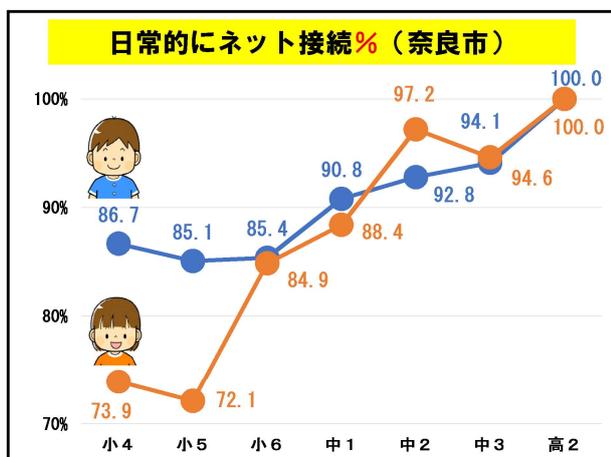
日常的にネット接続している割合をする。なお、4-2の所持率よりかなり高い割合で日常的に接続しているのは、彼らが自分の携帯電話からだけでなく、保護者の携帯電話や、ゲーム機等から接続しているからである。

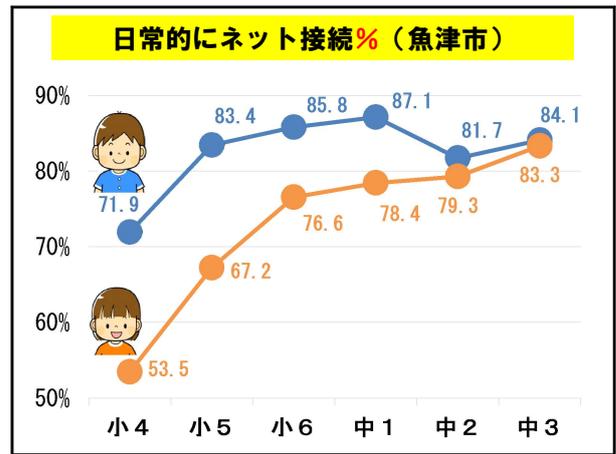
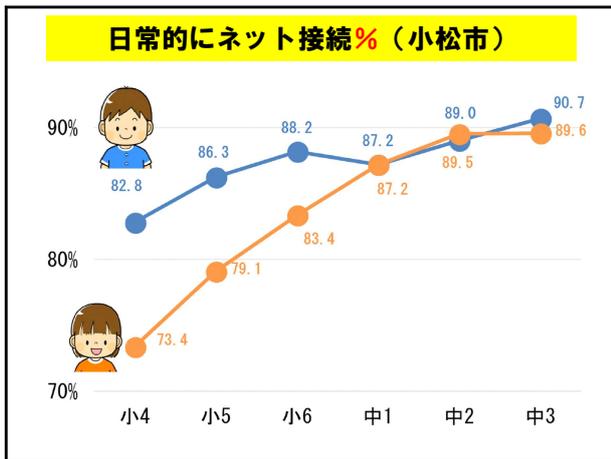
#### 4-3-1 日常的にネット接続する割合、結果



大阪府は小学1年生から調べている。驚いたことに、小学1年生男子で、すでに46.8%が日常的にネット接続をしている。先に掲載した、スマホ所持率よりはるかに高い比率である。別に行った聞き取り調査であわかったのは、多くがスマホから接続しているわけではなく、携帯ゲーム機やタブレット、保護者のスマホ等からの接続であることである小学1年生から小学5年生までは男子が女子より接続率が高い。これは、ゲーム機から接続するケースが多いからだろう。小学6年生で、女子が男子を上回るが、これはLINE等のSNSに接続することが増えてくるからと推察している。

兵庫県は小5以上について調べたが、大阪と目立った違いはない。小学校高学年になると9割近くが日常的にネット接続しているという事実が重要である。小学校高学年には少なくともスマホやネットについての啓発が必要なのがよくわかるグラフである。





他の地域も同様の調査を実施したが、地域によって大きな違いはなかった。共通しているのは、最初は男子の接続率が高いが、中学入学頃に女子が追い抜く（近づく）という構図である。各地の聞き取りからは、男子はゲームのためにネット接続することが多く、高い割合を示すが、思春期が近づき、女子のSNS等での接続が増えていることが見て取れた。SNSは、LINE→Twitter→Instagramの順で広がることが多いのだが、最近は小学生にもInstagramが流行しだしている。注意が必要である。

#### 4-3-2 日常的にネット接続する割合、考察

子どもたちの間に予想以上にWi-Fiが浸透していることがわかった。各家庭が当たり前のようにWi-Fiを常備し、子どもたちがそれを使いこなす。そういう時代になったということである。

多くの子どもたちが「ギガがもったいない」という言葉を聞いた。携帯電話やスマートフォンの契約時に、一ヶ月に使える通信量（ギガ数）が決まっていて、多くのギガ数を使える契約ほど高額である。ほとんどの子どもが「少ないギガ数で契約されている」とこぼしている。決まったギガ数をオーバーすると通信速度が極端に低速になってしまうので、連絡等にも支障をきたしてしまう。そのため子どもたちのギガ数節約の思いは切実である。

ここに各家庭が固定でWi-Fi契約をしていることが関係してくる。固定の設定なので、子どもたちは家に帰ると家庭のWi-Fi回線経由で接続する。接続しても自分の「ギガ」は減らないし、家族にも迷惑がかからないからである。このあたりが今の子どもたちの「ネット依存」的な日常を支えている外的要因であろう。

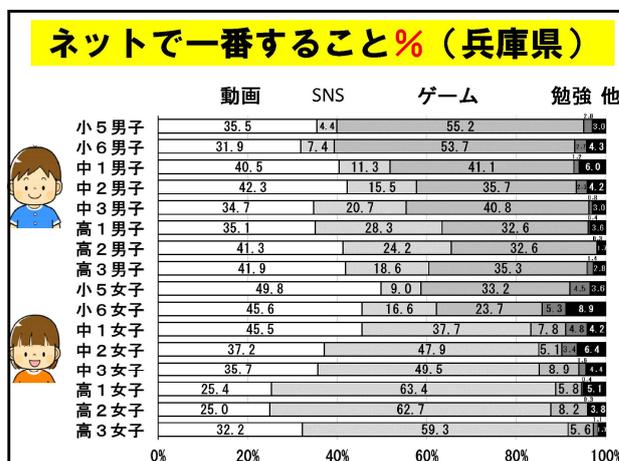
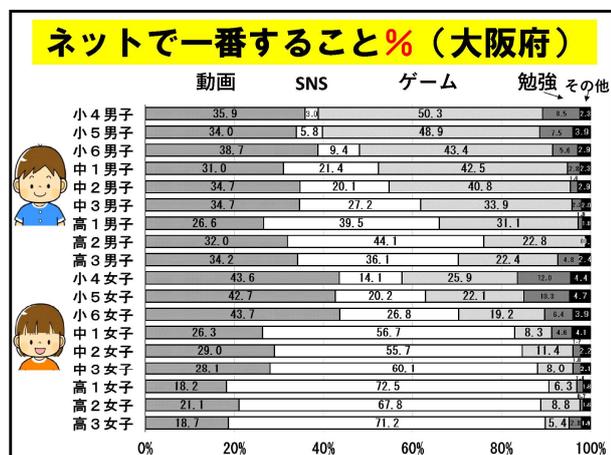
オンラインゲームの問題も大きく関係している。オンラインゲームに夢中になる子どもたちは、自分の家から、スマートフォンだけでなく、携帯ゲーム機、パソコン等で接続している。それもすべて家庭の固定のWi-Fiから接続することが多いので、「ギガ」を気にすることなく自由に遊べるのである。

折しも、「ゲーム障害」がWHO（世界保健機関）で病気に認定された。日本だけでなく、世界的な課題とされたのだが、このWi-Fi問題、ギガ問題をどう考えるかが解決の糸口になるかもしれないと感じている。今後の引き続きの研究が必要である。

#### 4-4 ネットで一番すること

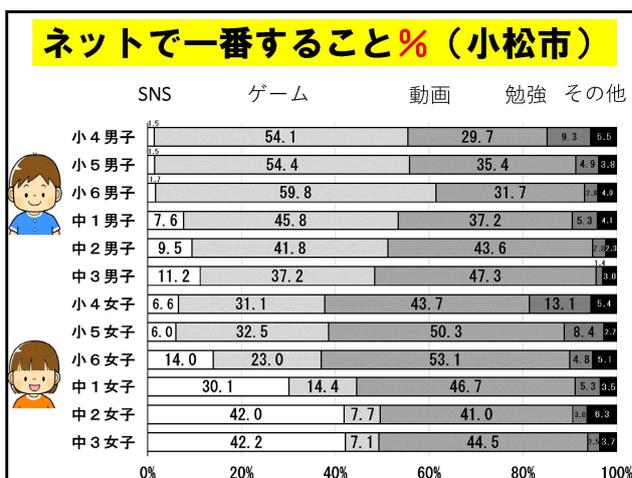
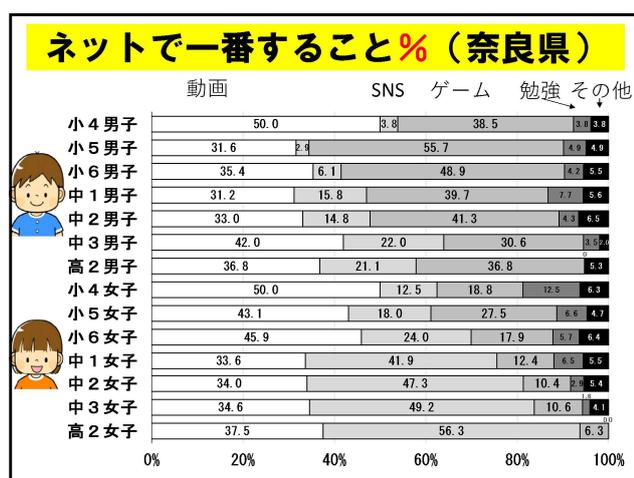
インターネットでどういうことを一番よくするかを尋ねた。選択回答とし、選択肢には、「動画」「SNS」「ゲーム」「勉強」「その他」を用意した。

##### 4-4-1 ネットで一番すること、結果



各学年で、「ネットで一番よくすること」を調べた。選択肢は、「動画視聴」「SNS」「ゲーム」「勉強」「その他」の5つ示した。

小学1年生の回答は難しかったので、大阪も小4以上に聞いている。男女ともすべての学年で3割程度が動画視聴をしている。聞き取り調査によると、YouTubeが圧倒的に多かった。「テレビよりYouTube」との発言も多く、「見ておかないと友達との会話についていけない」等の声も多かった。男子はゲームが多いが、中高生になるとSNSの割合が増えていき、高校生くらいで逆転する。女子は最初は動画視聴が多いが、中学入学頃からSNSが逆転する。思春期になり、友達と男情報交換に夢中になる生徒が多いからだろう。今年の特徴は、小中学生はよくするSNSとしてLINEを挙げるが、徐々にInstagramに移行していき、高校3年生になると、ほぼInstagramになる。高校生は、「LINEは業務連絡」と発言することが多く、「最近、既読無視も気にならない」と言う声も多い。



他地域もほぼ同じ実態であった。男子はゲーム、女子はSNS。男女とも動画視聴に夢中である。性別、年齢によって、扱う題材を変えなければならぬことがわかる。

※奈良県、魚津市はこの質問はしていない。回答者の負担軽減のためである。

#### 4-4-2 ネットで一番すること、考察

##### ①動画視聴

男女ともすべての学年を通して3割程度が「動画視聴」をあげている。小学生は「ユーチューバー」をあげる子が多い。「見ていないと話題についていけない」と話す子もいるほどで、彼らの生活にすでに深く浸透しているようである。さらに男子に多いのは、「ゲーム実況」。オンラインゲームの様子を実況中継するのだが、「うまい人のプレイを見て参考にする」等の声が多かった。ゲームにはそれぞれランキングがあり、その上位者は彼らにとってあこがれの存在。そういう人のプレイを見ることができるのは非常に有益に感じると言う。女子は「好きなアイドルやアーティストの動画を見る」と言う。コアなファンがいて、その人たちと情報交換を密に取っているため、新作が出るたびにしている。

他には、「昔のドラマとかをネットで見る」という声も多い。定額制の動画サイトが多数あり、そこでドラマを見ている場合も多い。昔、TSUTAYA等のレンタルビデオショップで借りて見ていた子どもが多かったが、「最近はネットに動画がいくらでもころがっているから飽きない」と話す小学生が多い。

##### ②SNS

中学生になるとSNSに時間を費やす場合が多い。特に女子にその傾向が顕著である。「最近、LINEは業務連絡」「スタンプとかも使わなくなった」という高校生が多い。その代わり、彼らの多くがInstagram等に投稿している。話題になった「インスタ映え」(Instagramで映える(みんなの目をひく)投稿)を目指すのももちろんだが、最近はストーリーズ(彼らの多くは「ストーリー」と呼ぶ)への投稿も多い。自分で撮影した動画投稿だが、「24時間で消えてしまうので、気楽に投稿できる」と言う。「いいね」の数にこだわる子も一定数いて、「どうやったら『いいね』が増えるかばかり考えている子も多い」。

##### ③ゲーム

小学生から中学生くらいにかけて、ゲームに夢中な男子が多い。昨年までは、「パズル&ドラゴンズ」「モンスターハンター」等、基本的に一人でプレイすることが多いものが主流であったが、最近は、「ロワイヤル系」と言われるゲームが流行している。多くの場合、5人程度で協力してゲームに参加する。例えば子どもたちに人気の「荒野行動」というゲームでの遊び方は以下の通りである。5人で無人島にパラシュートで降りたつ。島には約100人の敵がいて殺し合う。最後まで生き残ったら勝利である。島のあちこちに「落ちている」武器を取り、協力して戦う。文字通り、命がけなので必死である。5人で役割を決めて取り組む場合が多いので、気が抜けないし、みんなが参加するときに自分だけが参加しないと「迷惑がかかる」と言う。このあたりがポイントだろう。一人で行うゲームは自分の都合でやめられるが、複数で取り組むとなるとそうもいかない。

##### ④勉強

小学生には「勉強」とする子が多かった。通信教育をタブレット等で行うのだそうである。タブレットに示される問題にタブレット上で回答していき、問題や解説には動画が流れたりするので小学生には好評である。ポイントを貯める等のゲーム的な要素が取り入れられていることも多く、小学生くらいには熱心に取り組む場合も多い。特に塾等がまわりにない山間部等では、利用する子どもが多い印象である。また、受験生の多くが、動画配信を駆使した予備校で学んでいることも多い。最近は、英単語の暗記にアプリを利用する高校生も多く、今後も増えていく可能性が高い。高校3年生が「1日8時間くらいネットで勉強してるけど、予備校の講義を受けている」という。今後アンケートの回答方法に反映させなければならないと考えている。

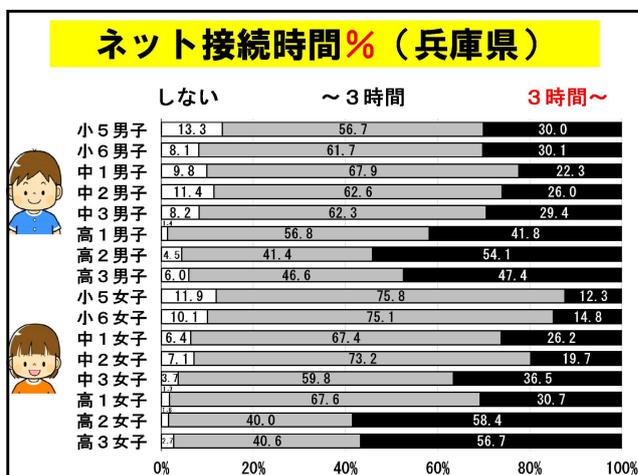
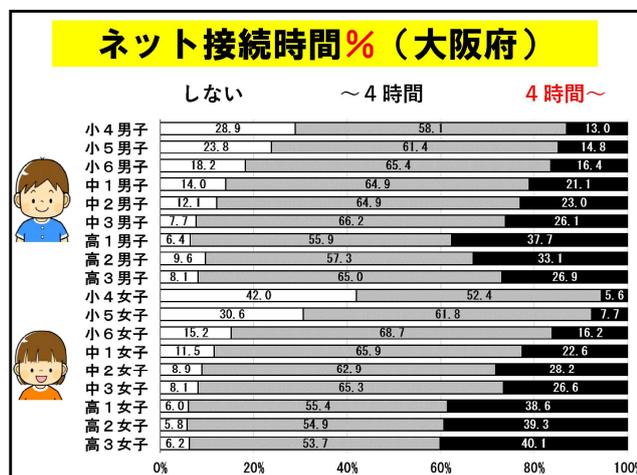
##### ⑤その他

その他を選んだ子は、その内容として多くが「調べ物」「音楽を聴く」等と答えた。「部屋にいるときはYouTubeでずっと音楽を流している」という子もいた。また「電話」と答える子がいたが、「夏休みは、起きたらLINEの無料通話で友達とずっと話していた」という回答もあった。LINEは無料だし、前述の通り、家のWi-Fiから接続すると「ギガ」も減らない。このあたりが一般的になってくると状況が変わってくる。実際、「LINEのテレビ電話で話ながら勉強してる」と話す受験生も多い。「実際は勉強より雑談になっちゃうので、最近はしていない」というが、このあたりについても注視しておく必要があるだろう。

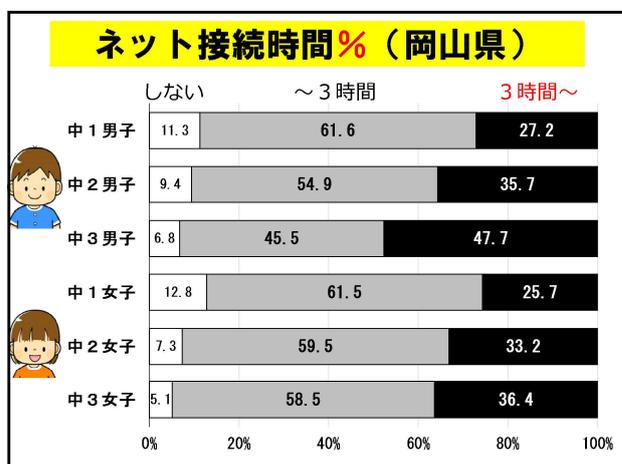
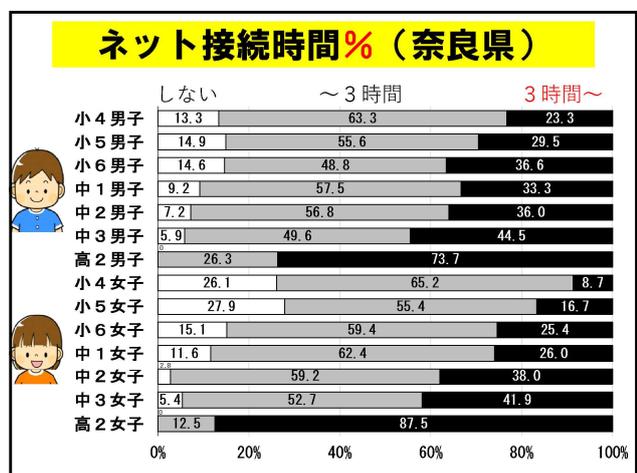
## 4-5 ネット接続時間

1日にどれくらいネットに接続しているか問うた。携帯電話やスマートフォン等からの接続だけでなく、保護者の携帯電話やゲーム機からの接続も含めた。

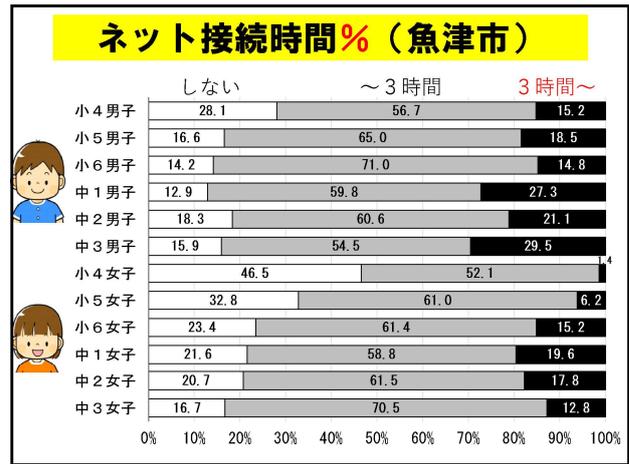
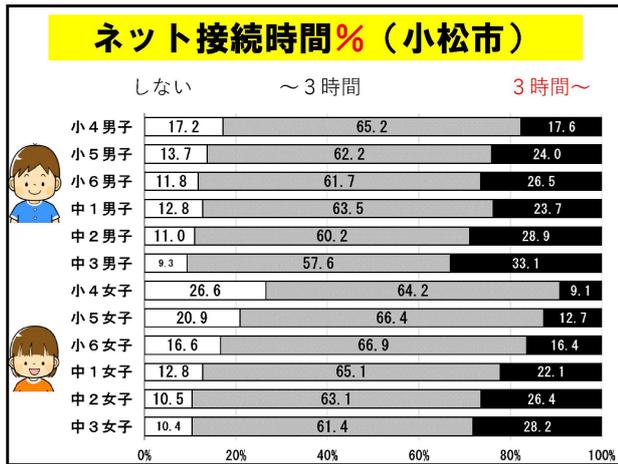
### 4-5-1 ネット接続時間、結果



ネットに接続する時間を質問しました。昨年度までは、子どもたちは「3時間」を目安にしていますが、大阪府の子どもたちは「4時間」と言います。「3時間なんてすぐに経ってしまう」と言います。子どもたちの意見で、今回は4時間で分析した。小学4年生ですでに13%が4時間以上、ネット接続していることがわかった。欧米の研究で、ネット依存は週40時間を目処としているので、来年度以降も継続していくことも考えている。



奈良県の高校生は、35人と少人数だったが、主催者（奈良県PTA連絡協議会）の要望で分析に加えた。奈良県、岡山県では、「男子のゲームが深刻」という声が多かった。「寝ずにゲームしてて、教室で寝ている子がいる」「3万円課金している人がいる」等の声が多く聞かれた。「睡眠不足でイライラしてケンカが増えている」という声もあり、子どもたちの生活にネットの状況が深く関係していることがよくわかった。



#### 4-5-2 ネット接続時間、考察

今回の結果を見る限り、子どもたちのネット接続は都会の方が多い。特に高校生の時間の長さが顕著である。WHO（世界保健機関）が「ゲーム障害」を病気に認定したこともあり、今後、ネットへの長時間接続が社会的な課題になっていくことが予想されるので、引き続き調査していきたい。今後は、長時間接続の弊害について取り組んでいかなければならない。

一方、子どもたちが勉強等にインターネットを活用しだしていることは前述の通りである。今後、社会の情報化が進むと、インターネットに接続しなければならないことも多々あるので、単純に時間だけでは云々できない状況になりつつある。そのような精緻な調査が必要になってくる。

#### 4-6 愛知県警察でのセミナーについて

様々な場所でワークショップを行った。それぞれの地域で特徴があったが、今回は特に、11月3日に愛知県警察と行った、性被害セミナーについて記載する。

愛知県警察が主催のセミナーで、インターネット起因で、性被害にあった児童（警察用語で児童は18歳未満をさす）が対象であった。自撮り被害（性的な写真を送付させられた）にあたり、ネットで出会った男性の性的な行為等で、愛知県警察が補導等を行った少女たちが対象である。

セミナーの前半は、産婦人科医が性病や避妊等についての具体的な話を行った。梅毒等の性病の生々しい実情や、コンドームの装着方法等、具体的な内容であった。

セミナー後半は、私がインターネット上で子どもたちの被害について、ワークショップを行った。6人程度の少人数に分けて、それぞれのグループに学生をファシリテーターとして配置した。

少女達と時間をかけて話をしたが、どの子もいわゆる不良と呼ばれるような、特別な子どもではなかった。ごく普通の家庭で、普通に育った子どもたちであったが、共通していたのは、寂しい気持ちを抱えていることである。インターネット経由で知り合った男性に殺された大学生について説明した場面で、ある中学生女子が「だって、ネットの人、優しいから」と話した。「何でも話を聞いてくれるし、相談に乗ってくれる」と言う。

他の地域でも、今年度はインターネット起因で性被害にあった児童生徒と複数関わった。どの子も、「インターネットの人は相談に乗ってくれた」「私の話なんて、誰も聞いてくれないから、優しくされてうれしかった」等、被害と思っていない場合が多いです。加害者は、子どもたちの寂しい気持ちを巧みに利用していることがわかります。対策の勘所はこのあたりで、子どもたちが親身になって相談に乗ってもらえると感じる大人の存在が非常に重要だということが改めてわかった。

## 5 総合考察

各地のサミットでの子どもたちの発言やアンケート結果から、子どもたちのインターネット接続の状況がわかった。予想以上の低年齢化と複雑化が見て取れる。

### 5-1 低年齢化

まず、低年齢化について。大阪府の結果からスマートフォンの所持率は、小学1年生（21.5%）の方が小学2年生（17.8%）より多いことがわかった。他の地域でも同じような状況が多かったため、小学1年生の子どもにスマートフォンを持たせている保護者10名に聞き取り調査した。8名が核家族で、夫婦ともにスマートフォンを持っていて、家に固定電話回線を引いていない。固定電話がないので、子どもへの連絡手段として、子ども自身に携帯電話を持たせる必要がでてきたという。スマートフォンが手軽だし、LINE等もできるからという回答だった。つまり彼らの子どもたちは、「スマホネイティブ2世」なのだ。

### 5-2 複雑化

次に複雑化について。子どもたちがネットで同じ事をしているのでは決してなく、子どもたちの間で多様性が出てきている。わかりやすいは男女差。男子がゲーム、女子はSNS。男女ともに動画視聴が好きだが、男子はゲーム実況等のゲーム関連を好むのに対して、女子はアイドルやバンドの動画を好んでみている。これから、情報モラル教育等を学校が積極的に行っていく必要が出てくるが、全ての子どもたちに共通の話題は難しく、ターゲットを定めて行う必要があるだろう。年齢に応じて変化していくこともわかったため、そのあたりについても要注意である。

さらに地域によって状況がことなることもわかった。今回は都会とそうでない地域の差に着目したが、インターネットを始める時期やインターネットでよくすることも異なっていることがわかった。地域の状況に即した指導を行う重要性がわかった。

### 5-3 広域課題と地域課題

各地の取り組みから、各地域によって異なる課題を持っていることがわかったが、共通する部分も多い。都会で起きていることが徐々に地方に広がっているように感じた。まだ印象レベルだが、今後、そのような研究の必要性を感じている。特に低年齢化が驚くほどのスピードで進んでいる状況を踏まえると重要性は高い。今回の研究で明らかになったことを踏まえて、今後、さらに深めていく必要がある。